

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鮑照「白頭吟」の心情表現：「赤」「白」対を中心に
Author(s)	小西, 美代
Citation	中國中世文學研究, 62 : 1 - 14
Issue Date	2013-09-20
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051442">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051442</a>
Right	
Relation	



## 鮑照「白頭吟」の心情表現——「赤」「白」対を中心にして——

小西美代

はじめに

鮑照「白頭吟」は、「直如朱絲繩、清如玉壺冰（直きこと朱糸繩の如く、清きこと玉壺冰の如し）」と、女主人公が自身の心情を表白することから始まる。一方、この作品の元となった古辞「白頭吟」冒頭二句では、「皚如山上雪、皎若雲間月（皚きこと山上の雪の如く、皎きこと雲間の月の若し）」と、女の一途な愛情を「白」という色彩に集約し、具象的に表現する。

両者の冒頭二句のみを抜き出すと、どちらもただ女の一途な愛情を、事物に喩えて具象的に表しているように思える。しかし鮑照の「直きこと朱糸繩の如く、清きこと玉壺冰の如し。」という句は、全体を通して考えると、より複雑で緻密な構成が盛り込まれていることに気づかされる。

中国で出版された樂府の解釈辞典、『樂府詩鑑賞辞典』では、鮑照「白頭吟」について、こう述べている。<sup>2)</sup>

漢樂府民歌の「白頭吟」は、男に二心があり、女が別

れを切り出すという内容を描き、詩中に「白頭不相離」という句があるので、「白頭吟」と名づけられる。しかし鮑照の「代白頭吟」の内容は、「本辞」とは違い、妻個人の恨み悲しみを描写するのみに留まらず、隠喩の手法を用い、古を借りて今を風刺し、当時の統治者がつまらない者を近付け親しみ、賢臣を排斥するという暗黒の官途をほのめかす。そのため、より深く広い社会的意義を持つ。

『樂府詩鑑賞辞典』が述べる通り、鮑照「白頭吟」には「食苗實碩鼠、點白信蒼蠅（苗を食らふは実に碩鼠、白を点すは信に蒼蠅）」という『毛詩』を用いた明らかに隠喩表現がある。その他にも、「つまらない者を近付け親しみ、賢臣を排斥する」当時の社会を暗示するとともに、表現が散見される。小人の嫉妬から讒言を受け、失脚させられた人物と言えば屈原が挙げられるが、その屈原の作品とされる「卜居」（『文選』卷三十三）には、「寧廉潔正直、以自清乎。（寧ろ廉潔正、直、以て自ら清くせんか）」という表現がある。自身の正直さ、潔白さ故に

苦境に立たされた屈原の、それを貴くべきか捨て去るべきかの苦悩を示したこの箇所は、「直きこと朱糸繩の如く、清きこと玉壺冰の如し。」と表現された、鮑照「白頭吟」の主人公の思いにも重なる所があるように思う。

このように鮑照「白頭吟」には、『樂府詩鑑賞辞典』が述べる通り、「古を借りて今を風刺」するという「社会的意義」を持つ一面が、確かに垣間見られる。

しかし「直」「清」が屈原のような清廉潔白な臣下の思いを暗示したものであるならば、「朱糸繩」「玉壺冰」という語は一体どういった効果を目的として選択されているのだろうか。「朱糸繩」「玉壺冰」は、鮑照以前の詩中には見られない語である。「玉壺冰」に関しては、盛唐の王昌齡「芙蓉楼にて辛漸を送る」に、「一片の冰心玉壺に在り」と明らかに影響を受けたと思われる心情表現が見える等、後世多大な影響を与えている。考察する意義は充分にあるだろうと思う。

なぜ鮑照がこれらの語を選択したか。筆者は、これらの語が「赤」と「白」という色彩を想起させるから、というのが、理由の一つとして挙げられると思う。

元となった古辞「白頭吟」は、第1・2句の、「皚きこと山上の雪の如く、皎きこと雲間の月の若し」から始まり、詩中にも「白頭相ひ離れず」という語がある等、「白」という色彩が反覆され強調される構成となっている。一方の鮑照作品では、一見「白」という色彩が字句から消えてしまったように思えるが、二句目「清きこと玉壺冰

の如し。」の「玉壺冰」という語に含まれる、「玉」や「冰」はしばしば「白」くつるつるとした物質として扱われる。また、対の「直きこと朱糸繩の如し」の「朱糸繩」という語に含まれる「朱」は、「赤」という色彩の範疇に含まれる。

次に引く鮑照「贈故人馬子喬詩六首（五）」（故人の馬子喬に贈る）では、明らかに意識的に「赤」「白」の色彩を用いて主人公の心情を表現している。

#### 「贈故人馬子喬詩六首（五）」

- 1 皎如川上鵠 皎きこと川上の鵠の如く
- 2 赫似握中丹 赫きこと握中の丹に似たり
- 3 宿心誰不欺 宿心 誰か欺かざる
- 4 明白古所難 明白 古の難しとする所なり
- 5 憑楹觀皓露 楹に憑りて皓き露を觀
- 6 灑酒盪憂顔 酒を灑ぎて憂ひの顔を盪ふ
- 7 永念平生意 永く念ふ 平生の意
- 8 窮光不忍還 窮光 還るに忍びず
- 9 淹留徒攀桂 淹留して徒らに桂に攀ぢ
- 10 延佇空結蘭 延佇して空しく蘭を結ぶ

第1・2句「皎きこと川上の鵠の如く、赫きこと握中の丹に似たり」は、古辞「白頭吟」と同じく色彩を用いることで心情を具象的に表現しようとしている。だが、古辞「白頭吟」と違って、「白」だけではなく、「赤」と

いう色彩を加え、「赤」「白」対に心情を仮託する。

主人公が過去に懐いていた心は、川の辺に佇む「鶺鴒」の如く「白」く鮮潔であり、同時に掌中に握る「丹」のように「赤」く誠実であった。しかし過去の心情は誰もが欺むくものであり、純粋なままでいることは古来から難しいとされてきた。柱に寄りかかって過去に無くしてしまつた「白」さを宿す露を見、酒を飲んで憂いを湛えた顔を濯すすごうとする。しかしそれは所詮一時的なものにすぎず、じつと昔の意志について考え続けるも、もはや尽きかけた光は彼の日に戻ることは適わぬものである。

「淹留」して「桂に攀」じのぼり、「延佇」して「蘭を結」ぶが、それは「徒」「空」が示すように徒勞にすぎないのだ。

第5句に「皓き露」、第9・10句に「桂」「蘭」が見える。「桂」は赤い樹であり、「蘭」は白い花である。冒頭で色彩を用いて心情を表現し、中途でその色彩を有する物質を示す、という構成は、古辞「白頭吟」と似通っている。

向嶋成美氏は「鮑照贈答詩考」に於いて、「贈故人馬子喬詩」六首が、「全体を通じて、古詩風の趣があり、しかも古詩によく見受けられる棄婦の情をうたうものが多いところに大きな特色が認められる」と指摘しておられる。作品構成といい、「棄婦の情をうたう」作品内容といい、古辞「白頭吟」との共通点が非常に多い「贈故人馬子喬詩六首(五)」の象徴として使われる「赤」「白」と

いう色彩。鮑照作品に「赤」「白」対は散見されるが、心情そのものを色彩に託し、表そうとしているのは「白頭吟」と「贈故人馬子喬詩六首(五)」、この二作品のみである。鮑照「白頭吟」冒頭二句に表れる「赤」「白」対は、明らかに意識的に作られたものだと考えられはしないだろうか。

### 一 鮑照「白頭吟」と「赤」「白」対

#### 鮑照「白頭吟」

1 直如朱絲繩 真つ直ぐな様は、まるで朱色の弦のよう  
2 清如玉壺冰 清廉な様は、まるで玉造りの壺の中の白く透明な氷のよう

3 何慙宿昔意 積年の思いを懐き続けることは、何も慙じることなどありませんが

4 猜恨坐相仍 猜疑と怨嗟に繰り返し苛まれることは、

どうすることもできません

5 人情賤恩舊 人間の感情は、古くからの関係を貶め

るものであり

6 世議逐衰興 世間の評価は、興衰に順したがい移ろい行く

ものです

7 毫髮一爲瑕 ほんのわずかでも、一旦それに傷がついてしまつたら

8 丘山不可勝 大きな山や丘でさえも、持ちこたえる事などできないでしょう

9 食苗實碩鼠 稲の苗を食い荒らすのは実際大きな鼠で

10 點白信蒼蠅

あり  
白い物に黒い足跡を残すのは、真実青蠅  
なのです

11 鳧鵠遠成美

鴨であれ白鳥であれ、より遠くから来た  
方が見目良いとされ

12 新蜀前見陵

薪であれ馬草であれ、より先に積まれた  
方が後の物の踏み台とされるもの

13 申黜褒女進

申后が出れば褒似がその地位に進み  
班婕妤が去れば趙飛燕がその地位に昇つ  
たといえます

14 班去趙姬昇

周の幽王は日増し褒似に溺れて行き  
漢の成帝は益々趙飛燕を褒め称えたとい  
えますが

15 周王日淪惑

心から愛されていて、猶抱り所とする  
には難しいのに

16 漢帝益嗟稱

容貌に対する敬いなど、どうして頼み  
にできませんようか

17 心賞猶難恃

古来より皆このようなものです

18 貌恭豈易憑

あまりの悔しさに独り胸を撫でるのはあ  
なただけではないのです

19 古來共如此

20 非君獨撫膺

ではここからは、李善注を参考として、個々の語を詳  
しく分析しながら、「白頭吟」に表される心情表現を考察  
していく。

登場人物の心情が集中的に表されているのは第1・2

句「直きこと朱糸繩の如く、清きこと玉壺氷の如し」、  
第20句「撫膺」だろう。

順番は前後するが、まずは第20句、「撫膺」から考察を  
加えていきたい。「撫膺」については李善が、『列子』説  
符の「昔、人有知不死之道者。斉子欲学其道。聞言者已  
死、乃撫膺而歎。（昔、人に不死の道を知る有り。斉子  
其の道を学ばんと欲す。言ふ者 已に死せるを聞き、  
乃ち膺を撫して歎ず。）」を引き、やるせない心情をどう  
にか抑えようとする動作であることを説明する。ちなみ  
に『文選』では「撫膺」という語が、本作の他に三作品  
で用いられているが、李善はその何れも『列子』説符「撫  
膺而恨。（膺を撫して恨む。）」を引いて説明する。これ  
については後述したい。

続いて多少重複するが、第1・2句「直きこと朱糸繩  
の如く、清きこと玉壺氷の如し」について分析していき  
たい。この二句は目に見えない人の思いを「直」「清」と  
形容し、主人公が自らの思いを清廉潔白であることを訴  
えているのは上述した通りである。古辞では一途な愛の  
「白」さを、一方では誰にも踏み荒らされていない清ら  
かな「山上の雪」に例え、また一方では「白」い雲に挟  
まれながら尚その「白」さが霞まない「雲間の月」に例  
える。「雪」「月」ともにその「白」く美しい様を詠った  
作品が『毛詩』に採録されており、伝統的な「白」い事  
物に喩えることで女の一途さを具象的に表現していると  
言える。

鮑照の「白頭吟」、「直」を「朱絲繩」という糸状のもので、「清」を「玉壺冰」という壺に入った水でそれぞれ明喩を用いて形容することにより、目に見えない心情を、より具体的なイメージを付して表す。

「朱絲繩」について李善は『礼記』楽器「清廟之瑟、朱絃而疏越。(清廟の瑟は、朱絃にして疏越なり)」、『桓子新論』「神農始削桐爲琴、繩絲爲絃。(神農始めて桐を削り琴を爲り、糸を繩りて絃を爲る。)」を引き、これが神聖な琴に用いられる「赤」色の弦であることを示す。

「朱絲繩」という語は鮑照以前の作品中に用例がないが、「朱絲」は『春秋』襄公十八年「左氏伝」の「獻子以朱絲繫玉二穀。(獻子 朱糸を以て玉二穀を繫く。)」に祈祷の際に用いる玉を繫ぐ「赤」糸として見え、「絲繩」は漢・辛延年「羽林郎詩」「就我求清酒、絲繩提玉壺(我に就きて清酒を求め、糸繩に玉壺を提ぐ)」に絹糸で作った繩として見える。また、「玉壺」について李善は『秦子』

「玉壺必求其以盛、干將必求其以斷。(玉壺は必ず其の以だ盛んなるを求められ、干將は必ず其の以だ断なるを求めらる。)」を引く。「玉壺」は玉で作られた酒器の意である。「玉壺冰」という語も鮑照以前の詩作品中に用例が無いが、「玉壺」は李善の引く『秦子』先ほど引いた「羽林郎詩」等で用いられている。「壺冰」も鮑照以前の詩作品中に用例が無いが、「冰」については『莊子』逍遙遊に「藐姑射之山有神人居焉。肌膚若冰雪。(藐姑射の山に神人の居る有り。肌膚は冰雪の若し。)」とあり、「冰」

が「雪」と同様に「白」い色彩を想起させる語であることがわかる。「玉壺」の「玉」も同様に「白」い色彩を想起させるため、「玉壺冰」は「白」い「玉壺」の中にあつて尚かすまない氷の「白」さ、「清」らかさが鮮烈に描き出された表現であると考えられる。「羽林郎詩」では、鮑照「白頭吟」第1・2句で見られる「絲繩」「玉壺」両語が用いられているが、この詩で用いられる「絲繩」「玉壺」は、酒の入った器物の豪華さを表したものであり、心情表現とは関わっていない。鮑照は豪華な器物を表す「絲繩」「玉壺」両語に、それぞれ「朱」「直」、「冰」「清」を加えることで、豪奢でありながら清廉潔白という、正反対の要素を内包したイメージを見事に描き切っている。そもそも「赤」「白」の組み合わせは、『楚辞』「大招」で美しい女性を「朱唇皓齒」と表したり、曹丕が「黎陽作詩三首(三)」で自軍の壮麗さを「白旄若素霓、丹旗発朱光」と表したように、古来から読者の視覚的イメージを刺激し文学作品に華やかな彩りを与えてきた。だが鮑照「白頭吟」で用いられている「赤」「白」対は、女の華やかな美しさ、もしくは女の仕える君主の権勢の華やかさという、心情の背景にあるものを描き出すためだけに用いられるのではなく、古辞「白頭吟」の「白」、また「贈故人馬子喬詩六首(五)」に於ける「赤」「白」対と同じく、心情そのものを色彩が持つイメージに仮託していると思う。鮑照以前の「赤」「白」対を用いた思婦詩を振り返りながら、詳しく考察してみたい。

二 思婦詩に見える「赤」「白」対と「白頭吟」

「赤」「白」対が用いられる詩のジャンルは多岐に渡りますが、その一つとして妻が夫を思う様を描写する思婦詩がある。例えば「古詩十九首（二）」（『文選』巻二十九）には、

- 1 青青河畔草 青青たる河畔の草
- 2 鬱鬱園中柳 鬱鬱たる園中の柳
- 3 盈盈樓上女 盈盈たる樓上の女
- 4 皎皎當窗牖 皎皎として窗牖に当たる
- 5 娥娥紅粉粧 娥娥たる紅粉の粧
- 6 纖纖出素手 纖纖として素手を出だす
- 7 昔爲倡家女 昔は倡家の女たり
- 8 今爲蕩子婦 今は蕩子の婦と爲る
- 9 蕩子行不歸 蕩子 行きて帰らず
- 10 空牀難獨守 空牀 独り守り難し

と第5・6句「娥娥紅粉粧、纖纖出素手」に「赤」「白」対がある。河のほとりの草は青青と映え、園の柳がこんもりと茂る春のたけなわ、楼の上には艶やかな女が窓際に立っている。その女は「赤」い紅とおしろいで化粧をし、ほっそりとした「白」い手をしている。この女は昔遊女屋の歌姫であったが、今は放蕩な男の妻となった。しかし男は帰らず、一人寝の空虚さに耐えきれないと女

は嘆く。

この詩では女の姿の美しさを「赤」「白」対により鮮やかに演出しているが、歌姫であった女の容貌が派手やかで美しければ美しい程、誰もいない屋内で時を消費する空虚さが女を苛む、という構成になっている。

また、遠行の夫を思う女の心情を詠った晋・張華「雜詩三首（二）」には、

- 1 逍遙遊春宮 逍遙して春宮に遊び
- 2 容與綠池阿 容与す 綠池の阿に
- 3 白蘋齊素葉 白蘋 素葉に齊しく
- 4 朱草茂丹華 朱草に丹華茂る
- 5 微風搖菝若 微風は菝若を揺がし
- 6 層波動芰荷 層波は芰荷を動かす
- 7 榮彩曜中林 榮彩 中林に曜き
- 8 流馨入綺羅 流馨 綺羅に入る
- 9 王孫遊不歸 王孫 遊んで帰らず
- 10 修路邈以遐 修路 邈として以て遐なり
- 11 誰與翫遺芳 誰と与にか遺芳を翫ばん
- 12 竚立独咨嗟 竚立して独り咨嗟す

第3・4句に「白蘋齊素葉、朱草茂丹華」とある。女は春の日に緑の池のくまをぶらぶらと散歩しており、そこには「白」い花の浮き草が「白」い葉と揃って咲き、「赤」い草には「赤」い花が茂っている。そよ風は 菝

や 若<sup>かきつた</sup>を揺らし、幾重もの波が芝や荷の葉を動かして  
いる。花の盛りの色彩は林の中を輝かし、流れる芳は  
女の綾絹の衣に入り込む。だが夫は帰つてこず、彼へと  
続く道は遙か遠くまで連なっている。衣に遺る春草の芳  
を一緒に楽しむべき夫が不在のため、女は一人佇み嘆く  
ばかりである。

この詩では春の美しい風景を「赤」「白」対により鮮や  
かに描写している。だが第8句「流馨、綺羅に入る」、  
第11句「誰と与にか遺芳を、甞ばん」が示唆する通り、  
この詩で描かれる春日の風景の艶やかさ、香り豊さは女  
自身のそれと重なり合うものであり、「古詩十九首(二)」  
と同様に、描かれる春日の風景が鮮烈で美しければ美し  
い程、夫不在のまま盛りの時を過ごす女のやるせなさが  
強調される構成となっている。

また陸雲「為顧彦先贈婦二首(二)」（顧彦先の為に婦  
に贈る）『文選』卷二十五には、

- 1 浮海難爲水 海に浮かびては水を為し難く
- 2 遊林難爲觀 林に遊びては觀を爲し難し
- 3 容色貴及時 容色は時に及ぶを貴び
- 4 朝華忌日晏 朝華は日の晏るを忌む
- 5 皎皎彼姝子 皎皎たる彼の姝子は
- 6 灼灼懷春榮 灼灼として春榮を懷く
- 7 西城善雅舞 西城にては雅舞を善くし
- 8 總章饒清彈 總章には清彈饒し

- 9 鳴簧發丹唇 鳴簧は丹唇より発し
- 10 朱絃繞素腕 朱絃は素腕を繞る
- 11 輕裾猶電揮 輕裾は猶ほ電を揮ふごとく
- 12 雙袂如霞散 双袂は霞の散ずるが如し
- 13 華容溢藻幄 華容は藻幄に溢れ
- 14 哀響入雲漢 哀響は雲漢に入る
- 15 知音世所希 知音は世に希なる所
- 16 非君誰能讚 君に非ずんば誰か能く讚へん
- 17 棄置北辰星 北辰星を棄置して
- 18 問此玄龍煥 此の玄龍の煥たるを問ふ
- 19 時暮復何言 時暮れて復た何をか言はん
- 20 華落理必賤 華落ちて理必ず賤しめられん

第5・6句に「皎皎彼姝子、灼灼懷春榮」、第9・10  
句に「鳴簧發丹唇、朱絃繞素腕」とある。この詩は「顧  
彦先の為に婦に贈る」と題されているが、内容としては  
妻から夫に返答する詩であり、都には時を謳歌する美し  
い女達がいるのだから盛時を過ぎつつある自分を顧みる  
必要はないとの旨を書く。「赤」「白」対が用いられる第  
5・6句、第9・10句はいずれも都の女の美貌を表すた  
めに用いられており、第5句「皎皎」については李善が  
前掲の「古詩十九首(二)」「盈盈たる楼上の女、皎皎と  
して窗牖に当たる」を引き、都の女の美貌を、古詩に現  
れる元歌姫のそれと同様に「白」く輝くようであること  
を示す。第6句「灼灼」については李善は引証しないが、



『毛詩』周南「桃夭」に「桃之夭夭、灼灼其華(桃の夭々たる、灼灼たる其の華)」とある。そのため、第6句は盛りを迎えて「赤く燃えるように咲く華に、女的美貌を喻えて言うと思う。

第9・10句「鳴簧發丹唇、朱絃繞素腕」、「丹唇」は李善が宋玉「神女賦」(『文選』卷十九)「朱脣的其若丹。(朱脣的として其れ丹の若し。)」を引き、これが丹砂のように「赤」く輝く唇であることを示す。「朱絃」については、鮑照「白頭吟」第1句「直きこと朱糸繩の如く」と同様に『札記』樂器「清廟せいぼうの瑟は、朱絃にして疏越なり。」を引き、これが神聖な琴に用いられる「赤せくい弦であることを示す。「素腕」については、曹植「洛神賦」(『文選』卷十九)の「攘皓腕。(皓腕を攘ぐ。)」を引き、都の女の「白」く鮮烈な美しさは、神聖さをも帯びていることを表す。

この詩で用いられる「赤」「白」対は、先に引いた「古詩十九首(一)」や張華「雜詩三首(二)」のように主人公である女的美貌を表す為に用いられているのではない。「赤」「白」対を用い、言を尽くして都の女的美しさを描写することで、夫がそちらに目移りしようとも盛時が過ぎ去りつつある自分には何も言うことはできないと結論づける。しかし「朝華は日の晏るを忌む」と述べるように、主人公に憂いの気持ちがないわけではない。むしろ都の女の描写が美しければ美しい程、華の零落に例えて己の身が軽視されることを世の道理だと受け止め、潔

く身を引こうとする主人公の内に潜むやるせなさ及びひしと伝わる構成になっている。

これらの思婦詩で用いられる「赤」「白」対が与える華美な視覚的イメージは、全て時の推移をどうすることもできない女のやるせない心情を強調する為に用いられている。

これらと同じく夫を思う妻の心情を描いた鮑照「白頭吟」第1・2句の「赤」「白」対が、時の推移をどうすることもできない女のやるせない心情を仮託した色彩であると仮定するならば、『樂府解題』がこの詩について「自ら清直にして芬かたが馥ななるも、鑠しやく金玷きんてん玉ぎよくの謗そしりに遭ふを傷む。君が恩の以はだ薄はきは、古文と近し。」と述べるのは、正確さを欠くと思う。「はじめに」で述べた通り、確かにこの作品は「古を借りて今を風刺し、当時の統治者が「つまらない者を近付け親しみ、賢臣を排斥する」当時の社会を反映する要素も多分に持っている。しかし思婦詩の系譜からこの作品を見てみれば、女の仕える君主の恩の薄さは必ずしも明言されおらず、女が彼の情愛の薄さを責めることもないのである。むしろ第13句から第16句で新しい女に心変わりした君主の故事を列挙し、それらを総括し「古来より共に此くの如し」と述べる様からは、古い女より新しい女を好むのは世の道理だと受け止めようとする姿勢が見られるように思う。鮑照「白頭吟」の内容についても一度見てみたい。

3 何慙宿昔意  
4 猜恨坐相仍

第3句、第1・2句「直きこと朱の絲繩の如く、清きこと玉壺の冰の如し」で表される一途な愛情を昔からずっと君主に懐き続けることは、何も慙じる所はないと述べる。第4句、一方で、猜疑と怨嗟に繰り返し苛まれることは、どうしようもないのだと述べる。その理由は以下で典故を踏まえ語られる。

5 人情賤恩舊  
6 世議逐衰興  
7 毫髮一爲瑕  
8 丘山不可勝

第5・6句、時間の推移に伴う人の情の移るいやすきを述べる。第7・8句、少しでも傷つけばどんな大きなものでも崩れ得ると述べ、世俗の評価の儂さを言う。李善は李尤「載銘」<sup>1)</sup>、仲長子「昌言」<sup>2)</sup>、孫盛「晋陽秋」<sup>3)</sup>、『文子』十守を引き、典故表現であることを指摘する。

9 食苗實碩鼠  
10 點白信蒼蠅  
11 鳧鶴遠成美  
12 薪芻前見陵

第9・10句、鼠や蠅を暗喩に用い周囲の誹謗中傷の酷さを述べる。李善は第9句について『毛詩』魏風「碩鼠」<sup>4)</sup>「碩鼠碩鼠、無食我苗」(碩鼠、我が苗を食む無かれ)を引き、第10句について「蒼蠅之爲蟲、汗白使黑」(蒼蠅の虫たる、白を汗して黒からしむる)と述べる。李善は陸機「塘上行」(『文選』卷二十八)「不惜微軀退、但懼蒼蠅前」(微軀の退けらるるは惜しまざれど、但蒼蠅の前まんことを懼る)で『毛詩』小雅「蒼蠅」の「營營青蠅、止于丘樊」(營營たる青蠅は、丘樊に止まる)と、鄭箋「蠅之爲蟲、汚白使黒、汚黒使白。喩佞人變亂善惡也。」(蠅の虫たる、白を汚して黒たらしめ、黒を汚して白たらしむ。佞人の善惡を變亂するを喩ふるなり。)を引いており、この二句が『毛詩』を踏まえた暗喩表現であることを示す。『毛詩』の言をそのまま引用した感が強いが、ここでも「白」という色彩が提示されていることを指摘しておきたい。

第11・12句、「鳧鶴」や「薪芻」を例にとり、近くにいろものや先に存在するもの程、遠くにいろものや後から来るものに蹂躪され易いことを述べる。第11句について、李善は『韓詩外伝』卷二「田饒事魯哀公而不見察。謂哀公曰、『夫鷄頭戴冠、文也。足有距、武也。見敵敢闘、勇也。有食相呼、仁也。夜不失時、信也。鷄有五德。君猶日澮而食之者、以其所從來近也。夫黃鵠一舉千里、出君園池、食君魚鼈、啄君稻粱。無此五者而貴之、以其所從

來遠也。故臣將去君、黃鵠舉矣。』公曰、『吾書子之言。』

(田鏡 魯の哀公に事へて察せられず。哀公に謂ひて曰く、「夫れ鶏の頭に冠を戴くは、文なり。足に距有るは、武なり。敵を見て敢へて闘ふは、勇なり。食有りて相ひ呼ぶは、仁なり。夜に時を失たざるは、信なり。鶏に五徳有り。君 猶ほ日に諭して之を食らふは、其の従り来る所の近きを以てなり。夫れ黃鵠は一挙千里、君の園池を出で、君の魚鼈を食らひ、君の稻梁を啄む。此れ五者無きも而も之を貴ぶは、其の従り来る所の遠きを以てなり。故に臣 將に君を去り、黃鵠のごとく舉せんとす」と。公曰く、「吾れ子の言を書さん」と。)を引き、第12句については『文子』上徳「虚無因循、常後而不先、譬若積薪燎、後者處上也。」(虚無因循は、常に後にして先んぜず、譬ふれば薪燎を積むが若く、後なる者は上に処るなり。)と『史記』汲黯伝「汲黯謂武帝曰、『陛下用群臣如積薪、後來者居上。』」(汲黯 武帝に謂ひて曰く、「陛下の群臣を用ふるは薪を積むが如きのみ。後に來たる者は上に居る」と。)を引き、これらが典故表現であることを指摘する。この四句は『樂府詩鑑賞辭典』が述べる「古を借りて今を風刺」という、この作品の「社会的意義」を持つ一面が、かなり強調されている。

13 申黜褒女進

14 班去趙姬昇

15 周王日淪惑

16 漢帝益嗟稱

第13句から第16句、古代帝王の例を挙げ、以前からいる女は新しい女に立場を奪われ易いことを述べる。李善は「申」「褒女」「周王」について『毛詩』小雅「白華」序を引く。また「班」「趙姬」「漢帝」について「班婕妤失寵、已見班婕妤怨詩。(班婕妤の寵を失ふは、已に班婕妤の怨詩に見ゆ。)」と述べる。

17 心賞猶難恃

18 貌恭豈易憑

第17・18句、第13句から第16句の内容を受け、心からの愛情であつても、それを抛り所とするには難しいのだから、容貌に対する敬愛などは尚更頼みにし難いものだと述べる。だがこの2句を待たずとも、美女の栄華の儂さは、第1・2句の「赤」「白」対によって既に示唆されていたのではないか。

1 直如朱絲繩

2 清如玉壺冰

第1・2句、自身の一途さを『礼記』に見られる神聖な「赤」い弦の真つ「直」ぐさ、「白」い玉造りの壺に入つた「冰」の「清」らかさに喩えて言う。「直きこと朱糸

繩の如く、清きこと玉壺氷の如し。」は、他人に知られることのない深い思いを、物に喩えることで具象的に表現する。真つ「直」ぐで「清」らかな思いを有す主人公は、華やかな権勢を持った君主に仕え、時勢を謳歌している美しい女性であることが「絲繩」「玉壺」という語や、「赤」「白」対により想起される。だが、鮑照「白頭吟」の「赤」「白」対は、美しいものも時と共に必ず衰えが来ることを知る女が懐くやるせなさを、同時に表現しているのではないか。

## 19 古來共如此 20 非君獨撫膺

第19句、多くの典故を踏まえて述べてきたように、時は移りかわり、人間がそれをどうすることもできないのは古來から皆同じである。第20句、「膺を撫」してそのやるせなさを鎮めようとするのは「君」だけではない、皆そうなのだと言ふようにして詩を結ぶ。「撫膺」は、胸をかかく叩く動作を示し、他人の目から見ても当人の気持ちに分かる心情表現であり、第1・2句に表されるそれが物に仮託された秘されたものであったのと対照的である。

「撫膺」について、李善が「撫膺恨」を引かず、「昔、人に不死の道を知る有り。斉子 其の道を学ばんと欲す。言ふ者 已に死せるを聞き、乃ち膺を撫して歎ず。」を引

くと先に述べた。斉子は「不死の道を知る有る者」でさえ死んでしまう現実をつきつけられ、「膺を撫」しため息をつく。斉子の「膺を撫」すに至るまでの原因を、李善がこのように長く引いたのは、鮑照「白頭吟」で表白される心情は仕える君主の情の薄さに対する恨みではなく、時を支配することはできない人間共通の苦悩であると理解したからではないだろうか。

## おわりに

「直きこと朱糸繩の如く、清きこと玉壺氷の如し」の二句から始まる鮑照「白頭吟」の全体を通して見てみると、確かに『樂府詩鑑賞辞典』が述べる通り、「つまらない者を近付け親しみ、賢臣を排斥する」当時の社会を暗示するととれる表現が散見される。

しかしそれと同時に、古辞「白頭吟」に描かれるような思婦詩の系譜も当然、強く受け継いでいる。本論文では主に、鮑照以前の思婦詩で用いられる「赤」「白」対の流れを概観し、鮑照「白頭吟」に於ける「赤」「白」対が従来の思婦詩に於けるそれとは異なる点を見つけた。

鮑照以前の作品では登場人物の美貌等、心情の背景にあるものを「赤」「白」対で表していたが、鮑照作品では古辞の「白」と同じく心情そのものを「赤」「白」対に仮託して表そうと試みている。また、古辞「白頭吟」で「白」に仮託し描かれる思いは一途な愛情それのみであったが、鮑照が「赤」「白」に仮託したのは、それだけではなく、

時間の推移に対するやるせなさ、という二重の「思い」であったのではないか、という点が李善注からも推察される。「朱絲繩」や「玉壺冰」という見慣れない語を用いるのも、このように複雑に入り組んだ主人公の思いを、読者の五感に訴えるよう、具象的に表現しようとした結果と考えられる。

当時の社会を風刺する傍観的な観点を持つ一方で、作中人物乃至は読者の抱える思いを抉り出すような幾重にも重なった作品構成は、鮑照表現に於ける一つの特徴と言えるのではないだろうか。

〔付記〕本稿は、平成二十四年度の中国四国地区中国学会大会（十月二十日 於広島大学）において、口頭発表した内容にもとづいている。当日、有益なご意見をくださったがたに、あつく御礼もうしあげる。

### 〔注〕

(1) 『鮑參軍集』『鮑氏集』では「代白頭吟」と題されているが、『文選』『樂府詩集』に採録されるものは、いずれも「代」字が無い。本論では『文選』巻二十八に収める「白頭吟」に従った。

(2) 『樂府詩鑑賞辞典』（李春祥主編 中州古籍出版社 一九

九〇）

漢乐府民歌《白头吟》是写男的有二心，女的表示决裂的内

容，诗中有一句「白头不相离」，故名《白头吟》。而鮑照这首《代白头吟》的内容，不同于「本辞」，它不再局限于描写妇女个人的哀怨，而是用隐喻的手法，借古讽今，影射当时统治者昵近小人疏斥贤臣的黑暗仕途，故具有更深广的社会意义。

(3) 『唐詩解釈辞典』（松浦友久編 大修館書店 一九八七）「芙蓉楼にて辛漸を送る 其の一」（解釈：高橋良行）では、「冰心」について、以下のように説明する。

氷のように澄み切った心。六朝（劉）宋の鮑照「代白頭吟」（『文選』巻二十八）に、「直如朱糸繩、清如玉壺冰」とあるのをふまえる。ただし、鮑照詩では、女性の男性に対する変わらぬ貞節の比喩として用いられているものを、王昌齡は、不遇にある士人たる自己の清冽な精神の象徴表現にまで転化したところが斬新である。鮑照の詩を典故とする作例は、盛唐の王維・李白・杜甫などにもみられるが、早くは初唐の駱賓王「別李嶠得勝字」詩に、「離心何以贈、自有玉壺冰」の句がある。

(4) 「玉」は光沢があり白く、透き通るように美しい石を言う。晋・吳声歌曲「子夜警歌二首（二）」「朱口發豔歌、玉指弄嬌絃（朱口 艶歌を発し、玉指 嬌絃を弄ぶ）」などを見ると、「玉」が「白く透明な色彩を表すことを想定して用いられているのが分かり易い。「氷」については本文で後述している。

(5) 『新しい漢字漢文教育』第四十五号（二〇〇七）

(6) 「撫膺」は、思いあまってむねを軽くうつ動作。『文選』

で「撫膺」という表現が用いられている作品。

卷二十六 陸機「赴洛二首（一）」「撫膺解攜手、永歎結遺

音」

卷二十九 張華「雜詩」「永思慮崇替、慨然獨撫膺」

卷五十七 潘岳「哀永逝文」「聞鳴雞兮戒朝、咸驚號兮撫膺」

いずれの場合も李善は『列子』説符「撫膺而恨。」（膺を撫して恨む。）を引く。

また、卷二十八 陸機「門有車馬客行」「拊膺攜客泣、掩

淚被涼源」でも、『列子』「撫膺而恨。」を引く。

(7) 「雪」については『毛詩』曹風「蜉蝣」に、

蜉蝣掘閑 蜉蝣 掘閑し

麻衣如雪 麻衣 雪の如し

とある。六朝期の「雪」については、佐藤大志氏『六朝樂府文學史研究』（溪水社 二〇〇三）附論「中国古典文學に於ける『雪』——東晋・劉宋期を中心として——」に詳しい。

「月」については『毛詩』陳風「月出」に、

月出皎兮 月 出でて皎たり

佼人僚兮 佼人 僚たり

とある。

(8) 陸雲「爲顧彥先贈婦（顧彥先の爲に婦に贈る）二首」（『文選』卷二十五）について、李善は「集亦云『爲顧彥先』。然此二篇、並是婦答、而云『贈婦』、誤也。（集も亦た「顧彥先の爲」と云ふ。然れども此の二篇、並びに是れ婦答へ、而るに「婦に贈る」と云ふは、誤りなり。）と述べる。『先秦漢魏晋南北朝詩』には四首掲載されており、「爲顧彥先贈

婦往返詩」と題されている。「顧彥先」という人物の詳細は不明だが、陸雲の兄陸機にも、「爲顧彥先贈婦」なる詩が二首存在し、いずれも『文選』卷二十四に採録されている。

(9) ただし、「灼灼」で想起される色彩は「赤」に限らず、陸雲「芙蓉詩」「盈盈荷上露、灼灼如明珠（盈盈たる荷上の露は、灼灼として明珠の如し）」のように「白」を想起させる場合もある。よって第5・6句は必ずしも「赤」「白」対をなしているとは言い切れない。

(10) 『樂府解題』、「古辭云『皚如山上雪、皎若雲間月。』又云、『願得一人心、白頭不相離。』始言良人有兩意、故來與之相決絶。次言別於溝水之上、叙其本情。終言男兒重意氣、何用於錢刀。若宋鮑照『直如朱絲繩』…（略）…皆自傷清直芬馥、而遭鑠金玷玉之謗。君恩以薄、與古文近焉。

(11) 李善引李尤「韞銘」「山陵之禍、越于毫芒。」（山陵の禍、毫芒を越ゆ。）、仲長子「昌言」、「事求絲髮之豐。」（事は糸髮の豐を求む。）、孫盛「晋陽秋」劉琨、王浚睡毗起於絲髮、豐敗成於丘海。」（劉琨、王浚睡毗として糸髮を起こし、丘海に敗成る。）、『文子』十守「禍福之至、雖丘山無由識之矣。」（禍福の至るは、丘山と雖も之を識るに由無し。）、

(12) 李善引『毛詩』魏風「碩鼠」「碩鼠碩鼠、無食我苗。」李善曰、「蒼蠅之爲蟲、汗白使黒、已見上文。」「上文」とは陸機「塘上行」（『文選』卷二十八）「不惜微軀退、但懼蒼蠅前。」で引く『毛詩』小雅「蒼蠅」の「宮宮青蠅、止于丘樊。」と、鄭玄箋「蠅之爲蟲、汚白使黒、汚黒使白。喻佞人變亂善惡也。」を指し、この二句が『毛詩』を踏まえた暗喩表現で

あることを示す。

(13) 李善引『韓詩外伝』卷二「田饒事魯哀公而不見察。謂哀公曰、『夫鷄頭戴冠、文也。足有距、武也。見敵敢闘、勇也。有食相呼、仁也。夜不失時、信也。鷄有五德。君猶日淪而食之者、以其所從來近也。夫黃鵠一舉千里、出君園池、食君魚鼈、啄君稻粱、無此五者而貴之、以其所從來遠也。故臣將去君、黃鵠拳矣。』公曰、『吾書子之言。』

『文子』上徳「虚無因循、常後而不先、譬若積薪燎、後者處上也。」

『史記』汲黯伝「汲黯謂武帝曰、『陛下用群臣如積薪、後來者居上。』」

(14) 李善引『毛詩』小雅「白華」序「幽王取申女以爲后、又得褒姒而黜申后。(幽王 申女を取りて以て后と爲し、又褒姒を得て申后を黜く。)」

(15) 班婕妤「怨歌行」(『文選』卷二十七)で李善の引く『歌録』には、「怨歌行、古辭。然言古者有此曲、而班婕妤擬之。婕妤、帝初即位、選入後宮。始爲少使、俄而大幸、爲婕妤、居增成舍。後趙飛燕寵盛、婕妤失寵、希復進見。成帝崩、婕妤充園陵、薨。(怨歌行は、古辭なり。然るに古は此の曲有り、而して班婕妤の之を擬すを言ふ。婕妤、帝初めて即位し、選ばれて後宮に入る。始めて少使と爲り、俄にして大幸せられ、婕妤と爲り、居増成<sup>ますます</sup>舍を成す。後に趙飛燕の寵盛んにして、婕妤寵を失ひ、復た進見せんことを<sup>こひねが</sup>希ふ。成帝崩じ、婕妤 園陵に充てられ、薨る。)」とある。